

プラマーナの定義について

木 村 誠 司

I

仏教論理学派¹⁾の創始者ディグナーガ Dignāga (480-540) は、『集量論』 *Pramāṇasamuccaya* の冒頭で、人間の認識と信仰の対象を同一の言葉で表現した²⁾。現在、暫定的に、前者を「認識手段」〔=知覚 (pratyakṣa)・推理 (anumāna)〕、後者を「権威」〔=仏陀〕と訳し、区別しているが、原語は同じプラマーナ (pramāṇa) というサンスクリット語である³⁾。さて、人間の認識と信仰の対象との関係は、仏教論理学派にとっても、当然避けて通れない問題のはずであった。しかし、ディグナーガは、その問題に深く立ち入らなかった。というより、彼は、その考察を嫌ったのかもしれない。なぜなら、ディグナーガは、『集量論』の末尾において、

認識の対象 (gzhal bar bya ba) と認識の主体 ('jal bar byed pa) の確立は、きわめて困難であるが、他派は、これについて、核心に触れずに (snying po med par) 教示するので、さらに、そ〔の教示〕に対する諸々の愛着を排除するために、これ〔=『集量論』〕を著わしたのである。〔しかし〕、これを通じて、如来の教示には入らないのである。なぜなら、彼〔=如来〕の教え (chos, dharma) は、論理学 (rtog ge) の範ちゅうではないからである。(『集量論』, 85b¹⁻²)

gzhal byar bya ba dang / 'jal bar byed pa sgrub dka' ba nyid kyi mu stegs can
'di la snying po med par bstan pa'i phyir dang / de la spro ba rnam bzlog par
bya ba'i don du 'di brtsams so / 'di las de bzhin gshegs pa'i bstan pa la 'jug pa
ma yin te / de'i chos rtog ge'i spyod yul ma yin pa'i phyir ro /

と述べているからである。ここに、ディグナーガの真意が表明されている、とみるならば、彼に問題の解決を求めるのは所詮無理である。この問題は、ダルマキールティ Dharmakīrti (600-660) によって、本格的に考察された。彼は、『量評釈』 *Pramāṇavārttika* 「量成就」 *Pramāṇasiddhi* 章をその考察にあてた。問題を解く鍵プラマーナは、同章の kk. 1-7 で、さっそく規定された。彼は、そこで、「認識手段」

(50) プラマーナの定義について (木村)

としてのプラマーナに定義 (lakṣaṇa) を与え、その定義は「権威」としてのプラマーナに適用される、と宣言した。kk. 1-7 は、一言で言えば、「プラマーナの定義」を説く詩節であり、章の序論に相当する重要なものである。それ故、この詩節は、多くの学者の注目するところとなり、これまで幾度も、翻訳・研究された。本稿は、それらを再考察するものである。

さて、筆者の知る限り、kk. 1-7 に対する翻訳のすべてにおいて⁴⁾、次の点は一致している。すなわち kk. 1-7 には、「欺かないものであること」(avisamvādatva) (X)と「未知の対象を明らかにするものであること」(ajñātārthaprakāśatva) (Y)というふたつのプラマーナの定義が説かれ、(X)は k. 1「プラマーナとは、欺かない知である」‘pramāṇam avisamvādi jñānam’で、(Y)は k. 5「あるいは、未知の対象を明らかにするものである」‘ajñātārthaprakāśo vā’で示されている。この当否は後に考察することにしよう。以下では、まず、ダルマキールティが(X)・(Y)をプラマーナの定義として採用した際の背景や動機について諸学者がどのような見解を示しているかを確認し、それらについて所見を述べよう。

II

近代の学者の代表的見解は次の三説である。彼ら自身の言葉で以下に示そう。

(A)シュタインケルナー E. Steinkellner, クラッサー H. Krasser 説

この定義の問題はいまだ十分に解明されているとは考えられない。この理由のひとつは、ダルマキールティの記述の歴史的状況や背景にある。つまり、彼はディグナーガの考えだけを踏襲したのではなく、パクシィラスヴァーミン Pakṣilasvāmin, そしておそらくより多くクマーリラ Kumārila の考えをも取り入れたのだが、そういった彼の思想的負債は、ダルマキールティがその陳述で意図した目的や暗示について明確な結論を下せるほど明らかになっていないのである⁵⁾。

(B)ビジュレル V. A. van Bijlert 説

ダルマキールティがそれらの詩節を著わす前には、それ以前の如何なる認識論書にも、一般的なプラマーナの定義は示されていない。それ故、『量評釈』第二章の kk. 1-7 はインド認識論において、きわめてユニークな位置を占めているの

である⁶⁾。

(C)フランコ E. Franco 説

この一節におけるダルマキールティの目的は、認識手段の一般的な理論を発展させることではなく、むしろ、仏陀が唯一真の認識手段であって、自在神や他の常住な実体はそうではない、と論証することである。・・・もし、ダルマキールティはプラマーナに一般的定義を与えることを試みずに、ただ仏陀がプラマーナであることを論証せんとした、という私の主張が正しいとするなら、次のように仮定するのは筋が通ったことであろう。すなわち、彼は既成のあるいは周知のプラマーナの特性を採用して、仏陀がそれらの条件を充たしているかどうかテストしたと⁷⁾。

(A)はあくまでも慎重であり、強いて結論を示していないので、ここでは(B)・(C)について考察しよう。

まず、(B)はダルマキールティの業績をきわめて高く評価する。しかし、(A)で指摘されているように、ダルマキールティ以前に、すでに、プラマーナと関連付けて(X)・(Y)についての言及がある。しかも、言及した人物がダルマキールティにとって強い影響力を持つディグナーガとクマーリラであることを考慮すれば⁸⁾、(B)は誤解を生じやすい説であろう。

次に(C)について考察しよう。まず「(X)・(Y)が既成のものである」という点は、(B)に対する考察からして妥当とみてよいであろう。しかし「(X)・(Y)は周知のものである」とまで言い切れるだろうか。筆者は、そう言い切ってもさしつかえないと考えている。(X)と(Y)の内容を今少し調べてみよう。(X)「欺かないものであること」は、たとえば、ダルモッタラ Dharmottara (740-800) ⁹⁾によって、次のように説明されている。

世間 ('jig rten, loka) では、約束したもの (khas blangs pa'i don) を獲得させる人が欺かない人 (mi slu ba) である (『量決択注』 *Pramāṇaviniścayaṭīkā*, p. (5), ll. 3-5) jig rten na khas blangs pa'i don dang phrad par byed pa mi slu ba yin pa
この説明からすれば、(X)は誰にとっても理解しやすい概念であり、周知のものとなり得るであろう。(Y)「未知の対象を明らかにするものであること」はどうだろうか。これについては、フランコ氏自身の指摘がある。氏は、「多くのインドの諸学派は、「認識手段」としてのプラマーナから記憶を除外する傾向にある」¹⁰⁾旨指摘

している。とすれば、(Y)も周知のものとなり得るであろう。

では、(C)全体は妥当なものであろうか。筆者は、フランコ氏の見解に魅力を感じると共に不満も感じる。氏は、何故、次のように言わないのだろうか、すなわち「ダルマキールティは、仏陀だけがプラマーナであり、自在神等はそうではないと論証しようとした。彼は、その土台となるプラマーナの一般的定義の確立に意を尽し、自派他派すべてが認めるような周知の定義を慎重に採用した」と。筆者には、この方がはるかに筋の通ったものに思われる。ジナ Jina は、次のように言う。

一般的定義 (spyi'i mtshan nyid, sāmānyalakṣaṇa) がなければ、ヴェーダ (rig byed, veda) 等がプラマーナ (tshad ma) でなく定義を離れているものであることは、理解できないので、プラマーナの一般的定義を確立するために、第一章〔=「量成就」章〕¹¹⁾でそれを示した。(『量評釈莊嚴註』 *Pramānavārttikālaṅkāraṭīkā*, De, 4a⁴)
 spyi'i mtshan nyid med na / rig byed la sogs pa tshad ma ma yin pa mtshan nyid dang bral ba can mi rtogs pa'i phyir tshad ma spyi'i mtshan nyid rab tu sgrub pa'i phyir le'u dang pos te de bstan pa

筆者はこのジナの見解を至当なものだと思う。今は、ジナの見解に賛意を表して、次の考察に移ろう。

III

先に紹介したように、kk. 1-7 に対するすべての翻訳において、「(Y)は k. 1 で示されている、(X)は k. 5 で示されている」という点は一致している。(Y)には何ら問題はない。しかし(X)には問題なしとは思われない。k. 5 は、実は、'śāstraṃ mohavivartanam ajñātārthaprakāśo vā' というつながりの文章である。これを訳せば「論書 (śāstra) は迷妄 (moha) を滅ぼすもの、あるいは未知の対象を明らかにするものである」となろう。この場合、(Y)の主語はプラマーナではなく、論書である。ビジュレール氏は、これに着目した。氏は言う。

文法的には、「論書は迷妄を滅ぼすもの」という陳述と続くように見えるが、デーヴェンドラブッディ Devendrabuddhi (630-690) や彼に続くすべての註釈者達によって、第二のプラマーナの一般的定義として解釈された¹²⁾。

確かに、k. 5 に対する諸註釈書は、一致して、ここに第二の定義が説かれている、と解釈する。次に、それらを列挙してみよう。

(ア)デーヴェンドラブッディ

かくして、そのようにプラマーナの定義「欺かないものであること」という第一のものが示されたのである。「あるいは、未知の対象を明らかにするものである」は別な第二〔の定義〕である。(『量評釈細註』 *Pramāṇavarttikapañjikā*, Che, 5b⁵⁻⁶)
de bas na de ltar tshad ma'i mtshan nyid mi slu ba gcig cig bshad do / mi shes don gyi gsal byed kyang / gzhan mtshan nyid gnyis pa yin no

(イ)シャーキャブッディ Śākyabuddhi (660-720)

これ〔=(X)〕は第一であり、一方これ〔=(Y)〕は別な第二種類のものである。(『量評釈註』 *Pramāṇavārttikaṭikā* Je, 79a⁶)
'di ni gcig yin la / 'di ni gzhan rnam gnyis pa yin no

(ウ)プラジニャーカラグプタ Prajñākaragupta

あるいは、これ〔=(Y)〕がプラマーナの定義である。(『量評釈莊嚴』 *Pramāṇavārttikālankāra*, p. 30, l. 3)
atha vedaṃ pramāṇalakṣaṇam

(エ)ギェルツァブ=タルマリンチェン rGyal tshab Dar ma rin chen (1364-1432)

欺かないものであることだけで、プラマーナの定義は完成しない、なぜなら、以前に未知のものである対象を明らかにするものであるから。最初にあるいは新たに知ることも、その定義の一部として述べなければならぬからである¹³⁾。(『量評釈頌の解説、解脱道不顛倒明説』 *Tshad ma rnam'grel gyi tshig le'ur bya pa'i rnam bshad Thar lam phyin ci ma log par gsal ba*, Cha, 131a²⁻³)
mi slu ba tsam gyis tshad ma'i mtshan nyid rdzogs pa ma yin te / sngar ma shes pa'i don gyi gsal byed de / dang po'am / gsar du shes kyang de'i mtshan nyid kyi zur du smros dgos pa'i phyir /

(オ)ゲドゥンドゥブ=ダライラマ一世 dGe 'dun grub Dalai Lama I (1391-1474)

欺かない知だけによってプラマーナの定義は完成するのだろうか。〔完成〕しない、なぜなら、以前に未知のものである対象を明らかにすることも、プラマーナの定義の一部としなければならぬからである¹³⁾。(『量評釈善説』 *Tshad ma rnam'grel legs par bshad pa*, 2b⁵⁻⁶)

mi slu ba'i shes pa tsam gyis tshad ma'i mtshan nyid yongs su rdzogs pa yin nam

(54)

プラマーナの定義について (木村)

zhe na / ma yin te / sngar ma shes pa'i don gyi gsal byed kyang tshad ma'i
mtshan nyid kyī zur du dgos pa'i phyir /

以上の註釈書によれば、k.5はプラマーナの第二の定義(Y)を説くものである。近代の諸訳もそれに従っているのであろう (ビジュレール氏も結局デーヴェンドラブッディの註釈に従っている)。しかし、ここに奇妙な事実がある。kk. 1-7中のk. 3は「世俗的なもの (sāṃvṛta) は、把握されたものを把握する (gṛhītagrahaṇa) ので〔プラマーナとは〕認められない」‘gṛhītagrahaṇān neṣṭam sāṃvṛtam’ という文章である。ここに第二の定義が示されていると考えても不都合はないはずである。だが、註釈者達はそう言わない。何故だろうか。もうひとつ注目すべき事実を挙げよう。ダルマキールティは、『量決択』の冒頭でも「このふたつ〔=知覚と推理〕によって対象を判断し行動するなら目的達成 (don bya ba, arthakriyā) について欺くことがないからである」(『量決択』 *pramāṇaviniścaya* p. 30, ll. 17-18) “di dag gis don yongs su bcad nas ’jug pa na don bya ba la bslu ba med pa’ i phyir ro’ と述べ、プラマーナを定義している。ここには、(X)だけが示されている。(Y)はk. 20の註釈部分にいたってようやく「プラマーナとは未知のものを対象とするものに他ならないからである」(『量決択』 p. 60, ll. 16-17) ‘tshad ma ni ma rtogs pa’i yul can yin pa nyid kyī phyir te’ と言及される。『量決択』の冒頭の記述が、プラマーナの定義を示すことを目的とするものならば、(X)(Y)はそこで同時に示されなければならないのではないか。何故、ダルマキールティはそうしなかったのだろうか。さらに、もうひとつ参考となる記述を示そう。それは、デーヴェンドラブッディのk. 1に対する註釈中の記述である。デーヴェンドラブッディは「〔後の知ではなく〕最初〔の知〕こそがプラマーナである¹⁴⁾」(『量評釈細註』 Che, 2b⁶) ‘dang po nyid tshad ma yin te’ と述べている。この記述は(Y)を念頭においたもののように見える。(X)を註釈する時点で、(Y)はデーヴェンドラブッディの意識にすでに存在しているのである。ということは、(X)は(Y)を含意していることになる。もしそうならば、どうなるだろうか。実は、先の事実の奇妙さは解消する、なぜなら、k. 3で(Y)を示す必要はないし、『量決択』で(X)(Y)を同時に示す必要もまたなくなるからである。しかし、そうすると、k. 5でことさら(Y)を第二の定義として示すことが、逆に奇妙にみえてくる。ダルマキールティには何か意図があったのだろうか。彼の意図はおそらく、次のようなデーヴェンドラブッディの註釈に表われていよ

う。

望んだ通りに、達成されるべき目的に対して欺くことがなく、未知の対象を明らかにするのでプラマーナに他ならないのである。そのように、世尊も至善 (nges par legs pa, nihsreyasa) 等を特質とする人間の目的 (skye bu'i don, puruṣārtha) に対して欺くことがなく、〔通常の〕認識者 (rtogs pa po) にとって達成されるべき人間の目的という未知のものを示すのでプラマーナに他ならないのである。(『量評釈細註』Che, 6b⁵⁻⁷)

ji ltar mngon par 'dod pa bzhin du bsgrub par bya ba'i don la mi slu ba'i phyir dang / mi shes pa'i don gsal bar byed pa'i phyir tshad ma nyid yin no / de ltar ni bcom ldan 'das kyang nges par legs pa la sogs pa'i mtshan nyid gyi skye bu' i don la mi slu bar mdzad pa dang / rtogs pa pos skye bu'i don bsgrub par bya ba mi shes pa ston par mdzad pa'i phyir tshad ma nyid yin no

ただし(X)に(Y)が含意されていることが周知のことであったなら、デーヴェンドラップディの註釈も説得力を失う。事実、コラムパ=ソナムセンゲ Go ram pa bSod nams seng ge (1429-1489) は次のように言っている。

欺かない知だけによって、プラマーナの定義は完成しているのである…『量評釈』や『量決択』(rnam 'grel nges) の諸典籍は、欺かないことを満たしているか、満たしていないかということに基づいてプラマーナであるなしを規定しているようにみえるが、「新たに・・・」〔=(Y)〕という語句を加えているようにはみえないからである¹⁵⁾。(『量正理の宝蔵の難解個所の説明 七部明説』*Tshad ma rigs pa'i gter gyi dka' ba'i gnas rnam par bshad pa sde bdun rab gsal*, p. 58/3.3~4.2)

mi slu ba'i shes pa tsam gyis tshad ma'i mtshan nyid yongs su rdzogs pa yin te . . . rnam 'grel nges kyi gzhung rnam kyis mi slu ba tshang ma tshang gi sgo nas tshad ma yin min gyi rnam bzhag mdzad par snang gi gsar du zhes pa'i tshig bsnan pa mi snang ba'i phyir

コラムパの見解は、合理的なものかもしれないが、一面「量成就」章の特異性をなおざりにしているように思われる。仏陀がプラマーナであることを論証する「量成就」章は、扱っているテーマがテーマだけに、ダルマキールティにとっても一種別格の存在だったはずである¹⁶⁾。その場合(Y)を提示することは必要不可欠となろう。筆者には、(Y)を不用とするコラムパの見解はダルマキールティの意図を反映しているようには見えない。

さて、コラムパと異なり、プラジニャーカラグプタは、「量成就」章の特異性を深く意識し、(Y)をことさら提示することにも重大な意味を認めた。プラジニャーカ

ラグプタは言う。

そのうち、これ [= (Y)] は究極的なプラマーナの定義 (pāramārthikapramāṇalakṣaṇa) であり、一方、前者 [= (X)] は、世俗的な (sāṃvyahārika) [プラマーナの] [定義で] ある。(『量評釈莊嚴』 p. 30, l. 22)

tatra pāramārthikapramāṇalakṣaṇam etat pūrvaṃ tu sāṃvyavahārikasya

プラジニャーカラグプタは、さらに言う。

知覚を本質とする世尊だけがプラマーナである。(『量評釈莊嚴』 p. 32, l. 5)

pratyakṣarūpa eva bhagavān pramāṇam

(Y)=究極的なプラマーナ=知覚=仏陀とするプラジニャーカラグプタの解釈は見事なものである。しかし、残念ながら彼の解釈は、ダルマキールティの意図を根本的に逸脱している¹⁷⁾。なぜなら、知覚と同一視された仏陀は、もはや論証不能の存在と化しているが、ダルマキールティは推理によって仏陀がプラマーナであることを論証しようとしているからである。では、なぜそう断言できるのか。答えは、k. 5にある。先に、k. 5は「論書は迷妄を滅ぼすもの、あるいは未知の対象を明らかにするものである」と読める、と指摘した。筆者よりみれば、この論書とは、直接的には、「量成就」章を指す。つまり、ダルマキールティは、ここで(Y)をプラマーナの第二の定義として提示するとともに、その(Y)は「量成就」章という論書を通じて理解すべきものである、ということをも示したのである。この場合、(Y)「未知の対象を明らかにするもの」の「未知の対象」とは、おそらく「量成就」章のメインテーマ四聖諦 (catuḥsatya) を意味することになろう¹⁸⁾ (本文 p. (55) のデーヴェンドラブッディ註参照)。さらに、k. 5を考察する上で、次の三点は忘れてはならない。a) 四聖諦はダルマキールティによって推理の対象とされていること¹⁸⁾。b) 言葉に基づく認識 (śabda) [= 論書] をダルマキールティが推理に含めていること¹⁹⁾。c) 「量成就」章の k. 1で「言葉に基づく認識にも [「欺かないものであること」(X)というプラマーナの定義は適用される] [諸者の] 意図を伝えるから」‘śābde’ pi abhiprāyanivedanāt’ と述べて、言葉に基づく認識に確固たる地位を与えていること。これらのことを考え合わせて、ようやく、ダルマキールティが k. 5に込めた意図はみえてくるであろう。少なくとも、k. 5は単に(Y)を示すものである、とする従来の翻訳は再考されるべきである。

以上の考察によって次のような結論が得られる。

① k. 5は、(Y)をプラマーナの第二の定義として示す詩節である。ただし、基本的

には、(Y)は(X)に含意される概念なので、(Y)をことさら提示することは、「量成就」章という特異な章において効果を発する。

- ② k. 5 は、単にプラマーナの第二の定義を示すものではない。論書＝「量成就」章を通じて(Y)が理解されるべきである、ということも示す。その意図は、知覚＝仏陀とする見解を斥け、推理〔＝論書〕に基づいて、「四聖諦という未知の対象を明らかにするもの」(Y)＝仏陀を理解させる点にある。

さて、これで終止まともりのなかった稿を閉じよう。本稿は、徒に問題を混乱させただけなのかもしれないが、今後、さらに考察を重ね、より明確な結論に到達したいと思う²⁰⁾。

註

- 1) 本稿では慣例に従ってこの呼称を用いるが、この呼称に文献的裏付けがあるわけではない。R. R. Jackson: *The Buddha as Pramāṇabhūta*, *Journal of Indian Philosophy* 16, 1988, p. 334 & n. 3 参照
- 2) M. Hattori: *Dignāga On Perception*, *Harvard*, 1968 pp. 23-29 参照
- 3) 本来ならばプラマーナに訳語を与えなければならないが、統一的な訳語を与えるのは困難なのでカタカナ表記した。なお書名ではすべて量と訳した。註2)の Hattori 本 n. 1-3, T. J. F. Tillemans: *Persons of Authority*, Franz Steiner, 1933 pp. v-vi, D. Jarkson: *The Status of Pramāṇa Doctrine According to Sa skya paṇḍita and Other Tibetan Mastors (The Buddhist Forum vol III)* Heritage Pub. 1995 pp. 87-88. 袴谷憲昭「選別学派と典拠学派の無表論争」駒沢短期大学研究紀要 第23号 H. 7年 pp. 46-47 参照
- 4) 被見し得た訳は次の通りである。
 - ①木村俊彦『ダルマキールティ宗教哲学の原典研究』木耳社 S. 56 pp. 32-38
 - ②谷貞志「逆行する認識論と論理」平川顕古稀記念論集『仏教思想の諸問題』春秋社 1985 pp. 534-54
 - ③渡辺重朗「『量評釈莊嚴』に於ける量の定義」成田山仏教研究所紀要 第一号 1976 pp. 367-370
 - ④稲見正浩「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(1)」広島大学文学部紀要 第51巻 1992 pp. 59-75。「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(2)」同 第52巻 1993 pp. 21-41
 - ⑤ S. Katsura: *Dharmakīrti's Theory of Truth*, *Journal of Indian Philosophy* 12, 1984, pp. 219-220

(58) プラマーナの定義について (木村)

- ⑥ V. A. van Bijsterveld: *Epistemology and Spiritual Authority* (WSTB, 20) 1989 pp. 115-168
- ⑦ E. Franco: The Disjunction in Pramānavārttika, *Pramāṇasiddhi Chapter 5c* (*Studies in the Buddhist Epistemological Tradition ed. by E. Steinkellner*) 1991 pp. 44-45
- ⑧ C. Lindtner: The Initial Verses of the Pramāṇasiddhi Chapter in the Pramānavārttika (") pp. 155-158
- 5) E. Steinkellner & H. Krasser: *Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger Erkenntnis in Pramānaviniścaya*, Wien, 1989 p. 3
- 6) 註4) - ⑥ p. XIX
- 7) 註4) - ⑦ pp. 47-48
- 8) 註4) のシュタインケルナー・クラッサー本 n. 4, K. Mimaki: *Le réfutation bouddhique de la permanence des choses et la preuve de la momentanéité des choses*, Paris, 1976 pp. 88-89, n. 302, 303 参照
- 9) ダルモッタラの年代については, H. Krasser: On the Relationship between Dharmottara, Śāntarakṣita and Kamalaśīla, *Tibetan Studies*, Narita 1989 p. 157 参照
- 10) 註3) - ⑦ p. 48 なおインド哲学における記憶の問題については, S. Bhandare: *Memory in Indian Epistemology its Nature and Status*, Sri Satguru 1993 参照
- 11) 『量評釈』の章の順序については異説がある。これについては, Th. Stcherbatsky: *Buddhist Logic* vol. 1 pp. 38-46, 拙稿「『量評釈』の章の順序について(1)」駒沢大学仏教学部論集 第19号 S. 64 pp. 471-462 参照
- 12) 註3) - ⑥ p. 150
- 13) チベット仏教におけるプラマーナの定義については, G. Dreyfus: Dharmakīrti's Definition of Pramāṇa and its Interpretations (*Studied in the Buddhist Epistemological Tradition ed. by E. Steinkellner*) pp. 19-51 に詳しい。タルマリンチェン・ゲドゥンドゥプの見解については, p.21 参照。また, タルマリンチェンの見解については, R. R. Jackson: *Is Enlightenment Possible*, Snow Lion, 1993 p. 184 参照
なお本書は「量成就」章に対するタルマリンチェン註の英訳である。
- 14) この前後の記述については, 稲見正浩「仏教論理学派の真理論」渡辺文麿博士追悼記念論集『原始仏教と大乘仏教』(下) 1993 pp. 91-92 参照
- 15) 註13) のドレイフェス論文 pp. 30-33 参照。
サキヤパンディタ Sa skya paṇḍita (1182-1251) 著『量正理の宝蔵』*Tshad ma rigs pa'i gter* 第八章では, プラマーナの定義は定義の付論として扱われている。それ故, チベット仏教においては, 定義の理解を前提としてプラマーナの定義を論じなければならない。ドレイフェス論文でも, 定義に触れているが, きわめて小さな扱いである (p.

- 26)。註4) のシュタインケルナー・クラッサー本 n. 5, 6 小野田俊蔵「mtshan nyid と mtshon bya について」印仏研 vol. 33 no. 1 1984 pp. 92-95, L. W. J. van der Kuijp: *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, Franz Steiner, 1983 pp. 59-60, pp. 65-69 参照
- 16) 拙稿「チベット仏教における論理学の位置付け」『チベットの仏教と社会』春秋社 S. 61 pp. 365-401 参照
- 17) 桂氏は註3) -⑤の論文において「実践的観点からは、人間の目的を達成し、対象について新しい情報を与えるという意味で知覚と推理は両方とも、欺かないもので真実である。純粹に認識論的観点からは、知覚のみが欺かないものであり真実である」(p. 230) と述べている。ビジュレール氏はこれを批判し次のように言う。「この<実践的>と<純粹に認識論的>という区別は、ダルマキールティ自身によっても、デーヴェンドラブッディによってもなされなかったように思われる。・・・これはプラジニャーカラグプタによって行われたものである」(註3) -⑥ n. 21)
- 18) 若原雄昭「アーガマの価値と全知者の存在証明」竜谷大学仏教研究 第41号 1985 pp. 59-61 参照
- 19) 秋元勝「Śabdapramāṇa をめぐる問題」印仏研 26-2 S. 53 pp. 679-680 戸崎宏正「ダルモットラとシャーンタラクシター語にもとづく知をめぐる一」雲井昭善博士古稀記念論集『仏教と異宗教』S. 61 pp. 273-283 参照

使用テキスト

ディグナーガ

『集量論』デルゲ版 No. 4204

ダルマキールティ

『量評釈』ed. by. Y. Miyasaka

『量決択』ed. by. T. Vetter

ダルモットラ

『量決択註』ed. by. E. Steinkellner & H. Krasser

ジナ

『量評釈莊嚴註』デルゲ版 No. 4222

デーヴェンドラブッディ

『量評釈細註』デルゲ版 No. 4217

シャーキャブッディ

『量評釈註』デルゲ版 No. 4220

プラジニャーカラグプタ

『量評釈莊嚴』ed. by T. R. Sāṅkrītyāyana

(60) プラマーナの定義について (木村)

タルマリンチェン

『量評釈頌の解説, 解脱道不顛倒明説』東北 No. 5450

ゲドゥンドゥプ

『量評釈善説』 Collected Works vol. 5

コラムパ

『量正理の宝蔵の難解個所の説明 七部明説』サキャ派全集 vol. 12

1995 6/28